

令和 5 年 5 月 30 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00354

研究課題名(和文)「嵯峨本願寺資料」に関する総合的研究

研究課題名(英文)A Comprehensive Research on the Collection of SAGA-HONGANJI Temple

研究代表者

川崎 佐知子(KAWASAKI, Sachiko)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：00536120

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、宗教法人本願寺(京都市右京区、通称嵯峨本願寺)が所蔵する「嵯峨本願寺資料」(計435点)を研究対象とした。はじめに、「嵯峨本願寺資料」の書誌調査をおこない、研究全体の基盤データを構築しつつ、研究資料として広範な活用が可能となるように、研究資料目録の作成に努めた。つぎに、「嵯峨本願寺資料」に存する近世の東本願寺に関する資料を重点的に考察し、禁裏・公家文庫との関係に注意しながら、東本願寺における蔵書形成過程の一端を明らかにした。さいごに、「嵯峨本願寺資料」からうかがえる近世の東本願寺周辺で展開された文学活動に注目し、京都における東本願寺の位置を明確化した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義の第一は、「嵯峨本願寺資料」が、東本願寺門主に関係する資料であると判明したことである。その資料構成は、「宗教開祖親鸞以来の教義の根幹をなす資料」「教如以降の近世の東本願寺門主に関係する資料」「明治・大正・昭和の法主に関わる資料」の三つに大別できる。学術的意義の第二は、とくに「教如以降の近世の東本願寺門主に関係する資料」の形成には、近衛閑白家が影響していたとわかったことである。近衛家第二十代基熙、第二十一代家熙のころに関係が深化したことが、東本願寺門主の蔵書形成に反映していると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study focused on the collection of SAGA-HONGANJI temple, including 435 items in total, owned by the religious corporation HONGANJI temple. The first stage is to research and study bibliographic materials. It is for building a new basic data bank. The next stage is to consider the contents of the materials, while taking into account the relationship with Imperial Household and Noble Collections. It is for describing the process forming the library collection of HIGASHI-HONGANJI temple in the Edo era. The final stage is to focus on the literary activities around HIGASHI-HONGANJI temple in the Edo period. It is for clarifying the position of HIGASHI-HONGANJI temple in the aristocratic society of Kyoto.

研究分野：日本文学

キーワード：文献学 東本願寺 近衛家 公家 門跡 京都 和歌

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 本研究を着想するに至った経緯

宗教学法人本願寺(京都市右京区)は、真宗大谷派本山の本願寺(通称、東本願寺)門主で旧華族大谷伯爵家の蔵書・宝物類計435点を蔵する。これらを仮に「嵯峨本願寺資料」と称する。東本願寺は、本願寺第十一世顕如の長男教如が、徳川家康の支援で慶長七年(一六〇二)に烏丸六条(現在の京都市下京区)に創成した。「嵯峨本願寺資料」は、東本願寺門主の蔵書を中核とする資料群と考えられる。435点は概ね三つに分類できる。

宗教開祖親鸞以来の教義の根幹をなす資料

教如以降の近世の東本願寺門主に関係する資料

大谷光勝(嚴如)以降の明治・大正・昭和の法主に関わる資料

上記のうち、本願寺開祖親鸞以来とされる根本資料である。を土台に、の近世資料、およびの近代資料が、三百年以上をかけて蓄積されてきた。この蔵書構成は、「嵯峨本願寺資料」という資料群の特色をなすものと考えられる。ところで、には、東本願寺門主の著述だけでなく、近世の天皇や堂上貴族との交流を示す資料が少なからず含まれる。には、明治維新以降華族に列し、皇族と縁戚関係を強固に結んだ大谷家の立場を反映する資料が多いように思われる。すなわち、東本願寺という寺院の沿革や門主の社会的役割が、「嵯峨本願寺資料」の固有性を支えていると考えられる。

### (2) 国内外の研究動向を踏まえた本研究の位置づけ

昨今、近世の皇室・公家をめぐる研究が活況を呈している。朝幕研究会編『論集 近世の天皇と朝廷』(岩田書院 2019年)は、研究の区切りをなす成果のひとつと思われる。その第三部「朝廷と宗教・諸集団」に、東本願寺は取り上げられてはいない。しかしながら、幕府の干渉を受けた東・西本願寺派とほか四派が存した近世京都の様相は、禁裏・公家社会にも無縁ではなかったのではなかろうか。そこで、本研究では、これまで研究対象として扱われてこなかった「嵯峨本願寺資料」を評価し、その検討を通じて、近世の京都における東本願寺の立場を明らかにし、さらに皇室・公家社会との関わりを考察することとした。

## 2. 研究の目的

本研究は、宗教学法人本願寺所蔵「嵯峨本願寺資料」を主たる研究対象とする。「嵯峨本願寺資料」を構成する計435点の書誌調査を実施し、得られたデータを基礎に、東本願寺における蔵書蒐集過程の推定と、近世京都における東本願寺門主周辺の文学的・文化的な活動の実態を照射する。研究の目的は下記の三つである。

「嵯峨本願寺資料」の書誌を調査し、研究全体の基盤データを構築する。同時に目録作成を進め、研究資料として広範な活用が可能となるように、研究的環境を整備する。

「嵯峨本願寺資料」に存する近世の東本願寺に関する資料を重点的に考察し、禁裏・公家文庫との関係に目配りしながら、東本願寺における蔵書形成過程の一端を明らかにする。

「嵯峨本願寺資料」よりうかがえる近世の東本願寺を中心に展開された文学・文化活動を重点的に考察し、京都における東本願寺の位置を明確化する。

## 3. 研究の方法

### (1) 重点研究テーマの設定

本研究では、着実に研究を遂行することを期して、つぎのとおり、研究年度ごとの重点研究テーマを設定した。

令和2年度 「嵯峨本願寺資料」の資料調査報告

令和3年度 「嵯峨本願寺資料」と禁裏・公家文庫の関係の解明

令和4年度 近世東本願寺文化圏に関する総合的考察

### (2) 各年度の研究手法

令和2年度

令和2年度は、「嵯峨本願寺資料」の書誌データを作成し、令和3年度以降の研究基盤を確立することに努めた。宗教学法人本願寺(京都市右京区)にて「嵯峨本願寺資料」を親しく閲覧し、複数回にわたる書誌調査を実施した。調査内容は原本の書誌と内容の確認、および資料判読であった。調査は令和2年6月以降、月1回程度実施することとした。この作業を通じて、「嵯峨本願寺資料」全体の概容把握を目指した。

令和3年度

令和3年度は、「嵯峨本願寺資料」と禁裏・公家文庫との関係を解明することを重点研究テーマとし、実見調査と情報収集、資料内容の分析・検討、研究成果の公表をおこなった。前年度に続き、宗教学法人本願寺において、「嵯峨本願寺資料」を調査した。後陽成院・後西院・後桜町院などの宸翰、涉成園に関する和歌・絵画資料を中心として調査し、基本的な書誌を確認し、本文や伝来の経緯などを検証した。公家と漢学に関する研究会を始め、月1回程度開催した。開催場所は立命館大学衣笠キャンパス(京都市北区)であった。研究会はZOOMを用いたオンライン併用形式でおこなった。海外からの研究者も参加した。

令和4年度

令和4年度は、前年度までの成果に基づき、さらに研究最終年度であることを意識して、東本願寺を近世京都の文学・文化史に位置づけることを重点テーマとして掲げた。江戸時代の東本願寺周辺の文学活動を把握するため、「嵯峨本願寺資料」の中で、『涉成園十三詠詩』『源氏物語』などの調査を実施した。調査機関は宗教法人本願寺で、月1回程度実施した。令和3年度に続き、研究会を主宰した。開催頻度は月1回程度、開催場所は立命館大学衣笠キャンパス(京都市北区)であった。

#### 4. 研究成果

##### (1) 研究期間内の主要な研究成果

〔学会発表、単独〕川崎佐知子「涉成園の偶仙楼をめぐって」(中古文学会関西西部会第58回例会、2021年6月12日、オンライン開催、開催協力校；京都女子大学〔京都市東山区〕)

「嵯峨本願寺資料」の一資料『和漢六歌仙板額』を取り上げた。『和漢六歌仙板額』一函十二枚は、現在は一函に収められ、厳重に保管されている。これらは、東本願寺別業の涉成園(現在の京都市下京区)にかつて存在し、著名な頼山陽「涉成園十三景」にも撰ばれた偶仙楼という建物内に飾られていた。板額の内容は新六歌仙の和歌と肖像、および詩仙六人の漢詩と肖像である。詞書筆者は近衛家熙、画は渡辺始興である。異種歌仙の一種といえるが、同様の作例はない。歌仙六枚は、同時代の堂上歌人が撰じた新六歌仙とは異なる撰定である。いっぽう、詩仙六枚は、当時、詩仙の標準とみなされていた石川丈山撰の詩仙堂丈山寺『三十六詩仙』の影響が色濃いのながら、先例にはない貫休という人物を撰んでおり、独自性が認められる。歌仙は良経と慈円、定家と家隆、俊成と西行、詩仙は李白と貫休、杜甫と王維、白居易と靈澈の対であり、さらに歌仙と詩仙を合わせた偶仙で、偶仙楼という建物の名称の由来ともなっている。先行例に、歌仙は公家・歌人、詩仙は武家・儒家・五山僧などの判別がうかがえたのに対し、『和漢六歌仙板額』は、近衛家熙が制作を主導し、単独で歌仙・詩仙の両方を染筆した点でも新趣向といえる。近衛家熙と渡辺始興との関係から考えて、『和漢六歌仙板額』の制作時期は、少なくとも享保十二年(一七二七)以降で、近衛家熙の晩年にあたると思われる。東本願寺と近衛家は、近衛家熙のころとくに親密で、その最たるものが近衛家熙女の房君(のちの樂邦院如縁)の東本願寺新門主玄如への入輿であった。『和漢六歌仙板額』は、従来の三十六歌仙による幕府の王権掌握とはべつの意味で、近衛関白家の権威を利用するものだったのではないかと結論した。

この研究成果の学術的意義を述べる。涉成園は、幕末の二度の大火で焼亡し、現在も完全な形で復興されているわけではない。「嵯峨本願寺資料」に『和漢六歌仙板額』を見いだせたことは、忘れ去られていた資料の再発見であり、東本願寺別業の様態を復原する手がかりともなる。渡辺始興の画業という観点でも新事実を提示できた。大和文華館編集の図録『開館40周年記念 特別展 渡辺始興 京雅の復興』(大和文華館 2000年)は渡辺始興による作例をかなり網羅するが、『和漢六歌仙板額』への言及はない。さらに、近衛家熙と東本願寺との関係について、これまで指摘されてこなかった文化的な交流を見いだせたことは大きな功績といえる。「嵯峨本願寺資料」には近世の皇室・公家との関わりをあらわす資料が含まれるとしたが、東本願寺門主の蔵書形成に、じつは近衛家が関与しているとの見通しを得ることができた。

〔図書、単著〕川崎佐知子『応円満院殿御詠歌 近衛基熙の家集』(古典ライブラリー、2022年)

東本願寺門主が近衛家との関係を深めた発端と思われる近衛基熙の和歌集の翻刻と注釈を主とする内容である。翻刻では、『応円満院殿御詠歌』に収載される二千二首に、附属文書に存在する三首を加えた二千五首全文の文字を精確におこし、通し番号を付して利便をはかった。各首に付した注釈には、家集編纂時の典拠資料の現存状況を示し、和歌が詠出された事情を、『基熙公記』などの記録類、書状、詠草などによって可能な限り探り出した。巻末に解題、和歌会年表、初句索引、題・詞書索引を付した。解題には、近衛基熙が靈元院在位の寛文・延宝・天和・貞享期に内大臣・右大臣・左大臣、東山天皇在位の元禄期に関白を務めたのち、宝永六年(一七〇九)十月、江戸時代の公家では初の太政大臣となった官暦をおさえたうえで、その宮廷歌壇における位置を知るためには『応円満院殿御詠歌』が有益であることを指摘した。次いで、現存本は全二冊の形態であり、第一冊は四季部、第二冊は恋・雑部で構成される、類題を主とした和歌集であること、若干の重複歌や同筆の書き入れがあることなど、『応円満院殿御詠歌』の内容上の特色を説明した。編者近衛基前筆の陽明文庫蔵本のほかに、近衛基前弟である大覚寺門跡亮深筆の大覚寺蔵本が残ることを紹介した。諸本の現存状況を鑑みて、『応円満院殿御詠歌』があまり広く普及したものではなかったと考えられることを述べた。収載歌と詠草との関係にも触れ、類題の過程を推定できる九括りの切紙の存在を論じた。

この研究成果の学術的意義の第一は、新資料である『応円満院殿御詠歌』を学術図書として公刊できたことである。一般に近世公家の和歌資料は膨大な数量が存在するために、全体像の把握がきわめて困難な状況にある。依拠すべき本文を提供するとともに、和歌会年表を付し、寛文二年(一六六二)から享保七年(一七二二)の長期間にわたる皇室・公家社会における和歌のあり方を明示できた。さらに、今回新たに発見した資料である九括りの切紙を詳しく検討したことによって、草稿段階の和歌からひとつの家集が編み出されるまでの具体的な工程をも解明することができた。

〔論文、単著〕川崎佐知子「大徳寺芳春院と近衛家」(『立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要』第15号、2022年3月)

「嵯峨本願寺資料」の資料構成から東本願寺門主との関係を見て取れた近衛関白家が、ほかの

寺院とどのようなつながりを有していたかを論じた。大徳寺の塔頭芳春院は、近衛家第十八代信尋が帰依して以降、近衛家の菩提所となった。江戸時代を通じて、毎月の忌日に当主が廟参する様子を、『尚嗣公記』『基熙公記』などの近衛家当主の自筆日記に認めることができる。芳春院の院主が近衛家本殿へ参上したことも、記録類からわかる。とくに第二十代基熙、第二十一代家熙とのかかわりで、芳春院第六世の桂嶽宗芳に注目した。細合喝堂ほか編『大徳寺禅語録集成』第六巻(法藏館 一九八九年)に収載される『桂芳集』は桂嶽宗芳の語録とされている。くわえて、桂嶽宗芳は生没年不明であり、大徳寺に出世していないために、『増補龍寶山大徳禅寺世譜』(思文閣出版 一九七九年)に記載されず、出自や経歴も不詳とされている(『大徳寺禅語録集成』解題による)。『応円満院殿御詠歌』雑部には、近衛基熙が「大徳第一座前桂嶽和尚」におくった和歌一首(1948番)と漢詩一首(1949番)が認められる。当時閑白であった近衛基熙がわざわざ詩歌の応酬を記し留めた桂嶽宗芳とはどのような人物だったのだろうか。この論文では、いまに残された資料から、桂嶽宗芳の文事を掘り起こすことを試みた。近衛基熙の日記『基熙公記』には、芳春院第三世一溪宗什、第四世宥峰宗恕、第五世心嶽宗欽の名を認め得る。同日記における桂嶽宗芳の初見記事は、心嶽宗欽の示寂を伝える元禄十一年(一六九八)十二月八日条で、以降の記事には断続的にあらわれるようになる。元禄十二年(一六九九)には近衛基熙のもとへ親しく出入りすることを許されたとわかる。元禄十三年(一七〇〇)十一月一日条には病気のために桂嶽宗芳が示寂したとあり、交流はわずか二年であったと知れる。『桂芳集』は、詩二百三十首に偈頌・讚・銘などを合わせた三百餘篇で構成される。詩二百三十首の題詞に注目すると、大徳寺第二百二十四世南海宗琳、第二百七十三世大心義統、第二百六十九世端崖宗言、第二百四十七世月溪宗吞などの大徳寺僧との応酬が見えるいっぽうで、180番詩よりのちは、近衛基熙との関係が著しい。元禄十二年と元禄十三年に限って見いだせる点は、『基熙公記』にも矛盾しない。さらに、『桂芳集』には、桂嶽宗芳が五摂家九条家の諸大夫石井利延の二男で、自身が明暦二年(一六五六)生まれであることを明かす記述がある。以上により、不明とされた桂嶽宗芳の生没年と出自や、近衛家との関係を明らかにすることができた。

この研究成果の学術的意義は、近世の近衛家の学問的交流の実態を明確化できたことである。大徳寺芳春院が近衛家の菩提所であること自体は、現在も墓所が残るだけに、よく知られた事実である。近衛家熙が書いたとして通用する『信長公記』の跋文も、桂嶽宗芳の代筆であることが『桂芳集』から判明するなど、近衛家の周辺に存在した僧の、知られざる役割を発見できた。

〔論文、国際共著〕川崎佐知子・芳村弘道・松尾肇子・中本大・黄鷺・高語莎「『桂芳集』抄譯註稿」(『立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要』第16号、2023年3月)

桂嶽宗芳の詩集『桂芳集』に掲載される詩二百三十首から、180番詩以降の近衛家との関係で詠出された詩二十七首(180・185・189・192・199・205・210・213・216・218・223・224・228番詩)を選び、訳注した。本研究課題の研究代表者(川崎佐知子)は185・195・209・216・223・228番詩と解題を担当した。訳注では、各詩の本文を掲げ、平仄と詩型、韻字を確認し、語釈をしたうえで、通釈を示した。とくに詠詩に至った状況がわかるような記録や詠草などがある場合には、参考資料を掲げた。近衛基熙は頻繁に芳春院を訪ねており、一乗院宮真敬親王や興福寺多聞院英算を伴うことが多かったようである。来駕に際しては和歌や詩が取り交わされた。『桂芳集』には、桂嶽宗芳の詩だけが収められているのであるが、同じ折に近衛基熙が作った和歌や漢詩が、『基熙公記』や詠草に残っていることも確認できた。応酬を付き合わせると、漢詩と漢詩はもちろん、和歌と漢詩を交わす場合にも同じ韻を用いることが判明した。たとえば、199番詩は、近衛基熙室の品宮常子内親王が南都東大寺の大佛の古材から霊像を作り、その点眼を桂嶽宗芳に依頼した際の詩である。桂嶽宗芳が近衛家の裏方にまで出入りを許されていたことがうかがえる。228番詩は、題「松并序」で、大徳寺の松を禁庭に移植することになった経緯を述べ、東山天皇の廷臣としての近衛基熙を誉め讃える内容である。寺院と皇室との縁をとりなす役目を近衛家が担っていたことが読み取れた。

近世京都の公家の周辺でなされた漢詩文を注釈することはあまりなされていない。あえてそれに取り組んだ先駆性こそがこの研究成果の学術的意義であるといえる。個々の作品の検討により、当時の公家社会における学問や思潮の基盤が奈辺にあり、何が規範とされ尊重されたのかがわかる。これは公家層の蔵書形成における傾向の解明にもつながる。同時に、記録や文書類とは少し異なる方面から、公家と寺院との交流を照らし出すことが可能となる。これまではほとんど知られていなかった近衛家周辺の人間関係を明確にすることができた。なお、この研究成果は、本研究の研究代表者(川崎佐知子)が主宰した研究会での輪読が基礎になっている。研究会は、2021年5月20日、同6月3日、同6月24日、同7月8日、同8月25日、同9月16日、同10月14日、同10月21日、同11月4日、同11月18日、同12月2日、2022年1月6日、同5月26日、同6月23日、同7月14日、同8月10日、同9月15日に開催した。開催場所はいずれも立命館大学衣笠キャンパス(京都市北区)であった。開催形式は対面を基本とし、ZOOMを併用して、海外の研究者も参加できるよう工夫した。

## (2)研究期間を通じての研究成果と今後の展望

研究期間全体を通じて、宗教法人本願寺に蔵される「嵯峨本願寺資料」計435点の書目と内容のおおよそを把握し、調査研究の土台を作った。そのうえで、個々に留意すべき主要な複数の資料にあたり、東本願寺を中心に展開された文学的営為の様相を捉えた。とりわけ、比較的早い段階で、公家の近衛閑白家が、この蔵書群の形成に深く関わるであろうという見通しを得たことは重大であったといえる。これまで、本山創成時の特別な事情により、東本願寺については、江戸

幕府との関係のみが注目される傾向にあった。しかしながら、本研究課題の遂行を通じて、東本願寺の文学活動の根幹に、京都の公家社会から多大な影響を受けていたことがたしかに認められた。その証跡が、まさしく「嵯峨本願寺資料」だったのだと結論する。引き続き、「嵯峨本願寺資料」の調査を進めるとともに、所蔵者の定める方法にしたがって許可をとり、適切な形で広く公開し、多くの人が利用できるような方向を考えていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 川崎佐知子	4. 巻 117
2. 論文標題 立命館大学図書館蔵『三十番歌合』をめぐる	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 論究日本文学	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 川崎佐知子、芳村弘道、松尾肇子、中本大、黄鶯、高語沙	4. 巻 16
2. 論文標題 『桂芳集』抄譯註稿	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 23-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 川崎佐知子	4. 巻 114
2. 論文標題 立命館大学図書館蔵『詠百首和歌』について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 論究日本文学	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 川崎佐知子・芳村弘道・中本大	4. 巻 15
2. 論文標題 翻刻『別本 御書物方年譜覚書』（其の二）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 79-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川崎佐知子	4. 巻 15
2. 論文標題 大徳寺芳春院と近衛家	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 35-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川崎佐知子・芳村弘道・中本大	4. 巻 14
2. 論文標題 翻刻『別本 御書物方年譜覚書』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 89-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 川崎佐知子
2. 発表標題 『桂芳集』209番詩
3. 学会等名 第十四回「近衛家の漢学」研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川崎佐知子
2. 発表標題 『桂芳集』216番詩
3. 学会等名 第十五回「近衛家の漢学」研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川崎佐知子
2. 発表標題 『桂芳集』223番詩
3. 学会等名 第十六回「近衛家の漢学」研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川崎佐知子
2. 発表標題 涉成園の偶仙楼をめぐって
3. 学会等名 中古文学会関西部会第五十八回例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川崎佐知子
2. 発表標題 村田春海による『狭衣物語』研究
3. 学会等名 第十六回欧州日本学会国際会議（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川崎佐知子
2. 発表標題 『別本 御書物方年譜覚書』について
3. 学会等名 白川研第二研究プロジェクト「日中韓漢籍研究」及び科研費「朝鮮渡り唐本の総合的研究」二〇二〇年度研究成果報告会
4. 発表年 2021年



〔図書〕 計1件

1. 著者名 川崎佐知子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 古典ライブラリー	5. 総ページ数 700
3. 書名 応円満院殿御詠歌 近衛基熙の家集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------